

# 変化と進歩のその向こう

(Next Society)



7月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2020年7月13日(月)

単なる対応のうまさだけでは、成功は望み得ない。

社会も経済も絶えまなく変化しており、大きな流れを知る必要がある。社会の変化とは、人口構成の変化、高齢者の増加と若年労働者の減少であり、世界中で出生率の低下が起きている。先進国だけではなく、発展途上国においても、若年層の縮小は後戻りの出来ない現象である。

加えて、大流通チャンネルとしてのインターネットの与えるインパクトと変化、eコマースの可能性が拡大に拡大を続けている。そのeコマースが、経済、市場、産業構造を根底から変えつつある。

これは、既に起きた未来であり、未来の起こす経済変動の次の波をつかむ必要がある。まだ、起きていない変化、進歩の向こう側を知ることが重要である。

このために必要なことは、“見つける”という行動である。歴史を見ると、ジェネラル・モーターのデュラント(自動車の時代が30年後に来るという未来学者の見通しに込めて、いや、自動車の時代は、既に到来していると言った)のような感覚である。

それでは、変化の向こう側にあるのは何か、それを見つけるためにはどうしたらよいか、20年前ドラッカーは、今後はコンピュータの使い方がキーポイントであるという言葉に対して、“10年後、15年後には、コンピュータではない情報の使い方が当たり前になっていなければならない”と言った。一時の変化とは人の話すことであり、本物の変化とは人の行動である。変化の向こう側にあるものが、コンピュータから情報へと変化した。

これは、既存の社会から、これまでなかった新しい社会への変化の入口であり、あと戻りすることのない変化である。

ドラッカーは、「Next Society(2002 著)歴史が見たことのない未来」の冒頭で、2001年秋のニューヨーク貿易センタービル攻撃がNext Societyの入口だと言ったが、コロナ事件は、これからの未来社会への入口となるのではなかろうか。

現状の、不十分な情報の中から、十分な仮定を得る必要がある。それは、内部の情報という片翼だけではなくて、外部の情報も得て、思考と感覚の両翼を身につけることでもある。外の世界の情報を入手するためには自分が外へ出かけてゆく外はない。未来を垣間見ようとする経験と努力をしなければならない。知識社会とは行動の社会である。